

こと。

- 3 許淑真「日本における労働移民禁止法の成立—勅令第 352 号をめぐって」(『アジアの法と社会』(1990 年)、同「労働移民禁止法の施行をめぐって」(『社会学雑誌』第 7 号、神戸大学社会学研究室、1990 年)
  - 4 『華僑華人—ボーダーレスの時代へ』(東方書店、1995 年) 122 頁
- 

## 質疑応答

司会：小風 秀雅

問：宮尾正樹（お茶の水女子大学）

お茶の水女子大の宮尾と申します。中国の近代文学を専攻しています。3 人とも大変面白いお話、ありがとうございました。ジェミールさんにお伺いしたいことがあります。

先程、近代の初期にトルコでは日本の近代化に対する考え方として、二つの見解がありまして、一つは指導者層の考え方、もう一つはナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者が、日本人の愛国心とか近代的な諸制度、優秀な指導者の存在などを理由として考えたとおっしゃいました。ナショナリスト、イスラム主義者というのは二つ並べてもそれほど変ではないんですが、欧化主義者まで入れると、今からみれば異質な人達が同じような立場に立ったというのが非常に面白かったのです。これは今から見ればこう分けられる要素があるけれども、当時にあつてはそれほど別の立場にあると考えていたのではなく、いってみれば一種の近代主義者のような形で存在していたのでしょうか。それとも当時からすでにそれぞれがナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者としてのアイデンティティがあつたのか、その点を伺いたいと思います。

答：ジェミール・アウドン（ハーヴァード大学・院）

あの時代も、そういうナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者という分別がありました。しかし、とくに 1910 年後に雑誌に集まった人達ですが、日露戦争の頃は全部同じ意見、彼らが主張したのは同じです。トルコ史を勉強している人には面白いことは、我々は彼らのなかの差異を強調しますが、共通点もたくさんありました。そうした共通点は、日本に対する態度からわかります。皆力のある国を作りたいとか。イスラム主義者もある程度モダニストです。彼らも近代化したいのです。

ただニュアンスの違いとしては、後のことですが、イスラム主義者は日本が伝統的な文化をよく守ったことを強く主張していますが、欧化主義者たちはこれをあまり主張せず、ある程度東洋の国は西洋の国になれるということを主張しました。

問：アン・ウォルソール（カリフォルニア大学アーヴァイン校）

アンと申します。専門は近代日本史です。伊藤さんに大変面白いご報告を聞かせていただいて、ありがとうございます。アメリカの場合、中国人が入るとき、男性で労働者のほうが多かったのですが、日本人は開港する時、大体中間層として入ってきたとおっしゃったのですが、それは男性ばかりだったのでしょうか、そうしたらいつから女性が入るようになったのでしょうか。

答：伊藤泉美（横浜開港資料館）

日本の場合、最初は男性中心です。統計資料から見ると、1870 年から資料がありますが、1875 年段

階で華僑人口が1300人、そのうち、男性1229人、女性71人、10年後、1885年は2499人、このうち、男性2034、女性465人、少し増えています。その後、1905年には全5334人のうち、男性3953人、女性1381人です。大体華僑人口は大正末・昭和初期で最大6200人ですが、このうち1500～1700人が女性で、後は男性、即ち三分の二が男性で、三分の一が女性という形ですね。

問：ウォルソール

それでは、中国人の男性は日本人と結婚したか、中国に帰ったか、そのまま独身で死んでしまったか、どうでしょうか。

答：伊藤

日本人の妻が非常に多いです。日本の女性と結婚する人が多いです。

問：楊嘉美シルビア（お茶の水女子大学・学部生）

お茶の水女子大学の楊と申しますが、同じく伊藤さんに伺いたいと思います。その華僑が入ってくる中国側の背景というのは何でしょうか。

答：伊藤

19世紀半ばは、非常に大量に南北アメリカや東南アジアに出て行く時代なんですね。プランテーションとかアメリカの場合は鉄道労働者です。しかし、日本には農業労働者や鉱山の労働者のような人は来ないんですね。都市で働く何らかの技術を持った人、あるいは商人なので、大勢の華僑が出ていくのが華僑史の中での一つのうねりではあるが、本国で働けないから日本に入ったのではなく、新しい港が開かれて比較的に近い所に開かれたから、自分たちのビジネスチャンスのための、むしろ積極的な移民ではなかったのかと思います。商人の場合は、自分のテリトリーを広げていく手段として出てくると思います。

問：三浦徹（お茶の水女子大学）

お茶の水女子大の三浦です。私はアラブ史、中東史をやっているものですが、ジェミールさん、伊藤さんの報告を伺いまして、見えないところで世界関係はつながっていると感じました。私たちは日本国内のことしか見ていないのですが、実は外から見られていて、それがトルコの場合は、東洋イメージの形成に関係しているという点が大変面白かったんですが、それに関係して、日露戦争期が一番問題になる。

日露戦争期は日本が一種の理想になっていたということですが、これはコメントになりますが、逆に日本の側は、中東諸国への見方が逆転します。それまでは不平等条約改正がありまして、明治政府は中東諸国にシンパシーを感じていたのですが、日露戦争以後ガラリと変わります。とくにイギリスのエジプト統治が日本の韓国統治のモデルとして使われていく。日本は日露戦争を機に全く逆の関係を持つようになりました。

それに関係しまして、ジェミールさんの発表で負の側面というのがあったんですが、第2次世界大戦期、日本が中国、満州を侵略、植民地化していく時、トルコは日本の動きをどういうふうに把握していたのか、東洋の国という日本への見方は変わらなかったのか、これが第一の質問です。

そして井村さんに伺いたいんですが、中国での日本の植民地支配研究の場合、日本だけが問題になっているのか、同じ帝国主義のイギリス、フランス、ドイツの植民地支配と比較して、日本を問題にするのか。例えば東南アジアの植民地支配の仕方と違うのか、植民地支配比較史研究という視点が中国側の

研究にあるのかどうか、伺いたいと思います。

答：アイドゥン

トルコが日本と条約を結ぼうとしたのは日露戦争の前でしたが、日本は不平等条約を主張したため、トルコ側の希望にもかかわらず、残念ながら、共和国時代の1924年までは外交関係はつくれませんでした。日本の意識は、西洋に対して平等であるという意味で東洋という言葉を使っていますが、東洋の国に対しては日本が上であるという見方があって、これは日本の思想史として面白い問題です。東洋という言葉の使い方も、日本思想史では最近多くの論文が出ています。

で、第2次大戦前の時期の問題ですが、トルコでは知られていますが、1930年代に入って、満州事変の後に、日本は上手にイスラム世界に対する政策を作ります。プロパガンダ政策ですが、軍部や右翼は、在日のトルコ人と一緒にイスラム世界についてのプロパガンダ政策を作る。アラビア語やトルコ語のパンフレットとか本とか、ラジオの演説とか。これはある意味で成功しました。日本にいるイスラム教徒は大体ロシアから逃げて来た人達ですから、日本がロシアを攻撃したらもう一度自国が独立できると考えて、日本を手伝いました。これについては、アメリカの OSS (CIA の前身) も気がついて、太平洋戦争期、1940年代前半に「日本のイスラム世界に対する政策」という、サイコロジカル・ウォーという観点からの研究があり、日本が成功したとアメリカ側は気付いていました。でもそれほど成功したのかどうか、ともかくアメリカは誇張しています。しかしトルコ政府は、オスマン帝国が第1次大戦期にパン・イスラム主義をつくって西洋と戦い失敗しましたが、日本のやったことはこれに似ているとして評価していませんでした。例えば東京のトルコ大使館は批判的で、超然とした態度をとり、プロパガンダに参加しませんでした。ただ、市民の関心としてはまだ「日本に続け」だったと思います。

答：井村哲郎（新潟大学）

質問は、例えばイギリスの中国支配と日本の中国支配との類似点、相違点が中国において比較研究されているのかどうかということだと思います。私は特に東北をやっておりますので、中国全体について言えばよく分からないんですが、そういう観点での研究は東北の場合、ほとんど無いと思います。たとえば買弁なども諸国の場合を総合して比較しようとする研究はありません。ただ例えば、中国がロシアが中国東北と如何に関わっていたのかについては相当あります。ロシア帝国の時代、東清鉄道経営の問題、また戦後の東北におけるソ連軍がどういうことをやっていたのかについての研究は少しずつ進んでいます。しかし、比較植民地支配研究というのは、実は日本でも成されていないのが実状です。ですから、今日出席いただいた若い方で、比較植民地史、例えば日本と中国、または日本とイギリスの植民地支配比較を研究する方がいらっしゃれば、大変助かると思います。

問：岩下哲典（明海大学）

明海大学の岩下と申します。

伊藤さんにご質問させていただきたいのですが、私は近世の対外関係をやっておりますが、長崎との比較で、長崎ではオランダ人よりも中国人のほうが日本人からは好ましく思われていたという記述がいくつかあります。横浜においては、日本人が中国人の買弁や華僑をどのように考えていたのかということについては、研究などはあるのでしょうか。

答：伊藤

日本人がどう考えていたのか、日本人と中国人華僑社会との関係はどうなのか、というのは重要なボ

イントなのですが、史料的に纏まったものは難しいので、まとまった研究は今のところないと思います。ただ、買弁と日本人との対立については、商権回復運動などの面では若干あります。

問：馬曉華（大阪教育大学）

私は大阪教育大の馬ですが、3人の方に一言ずつお伺いします。まず「トルコから見た近代日本」ですけれども、トルコの日本に対するイメージは大変理想的だというふうにおっしゃいました。トルコはアジアの一員という誇りか、もともとヨーロッパに近いので、これからアジアに戻るというか、そういうアジアに戻るという意識がどういうふうに明治維新以降に変わって来たのか、ぜひ伺いたいと思います。

もう一つ、近代日本の植民地問題についてつい先日私は学会でシンガポールに行きまして、シンガポールの国立博物館に見学に行きましたが、展示会のやり方、まずイギリスの植民地時代のものもありましたが、やはり圧倒的に占領期の日本人の残酷さというものがかなり多くありました。同じ植民地支配をされていたのに、何故そういう異なった記憶や差があるか、支配する側から見れば、占領者の支配政策はどこまで違うのかということですね。

3番目、日本社会における中国系移民、華僑といいますが、日本の場合、何故商人層が圧倒的に多かったのか、それはどういう背景があったのでしょうか。アメリカに行く場合、98%が労働者ですが、何故日本の場合は商人層しか移入されなかったのかについて、説明をお願いしたいと思います。

答：アイドゥン

アジアに戻るということは日本には「脱亜」の反対概念としてはあるんですが、私が主張したいのはトルコでは「戻る」ということは無いんです。もともとアジア人という意識が無かったので「戻る」ことも無かった、新しく作られたものです。共和国時代で「脱亜」ではなく「脱イ」、イスラム世界から出るというものです。面白いのはトルコには昔は関係なかったのに近代化の体験のなかで、オリエンタリズムとか対ヨーロッパとの体験のなかで、日本と共同体という感じを作ったという過程が面白いと思います。

答：井村

一言でお答えするのは非常に難しいというか、お答え出来ないんですが、一つだけの側面だけ申し上げます。それは大日本帝国陸軍の戦争思想の問題が絡んでいると思います。

日本軍の作戦思想のなかに、「以戦養戦」、つまり戦争を以て戦争を養う、あるいは「現地調弁」、つまり現地で食料や武器弾薬その他を確保しなさいということがあります。それは何を意味するかというと、軍事用語でいうと「兵站」の非常な軽視なのです。現地の第一に立たされた兵士は、食料その他を現地で調達しなければならない、どうして調達するかというと結局取ってくるしかないわけですね。そういう問題が一つあります。それともう一つは、シンガポールの場合ですと、41年12月8日マレーの進軍がタイから始まりまして、42年2月11日シンガポールが陥落する、その過程で日中戦争の中で東南アジアの華僑が中国本土の中国人に対する経済的・資金的な援助を非常にやっていたということが一因になって、シンガポールの中国人虐殺が起きるわけです。それは中国でいえば、南京大虐殺ですし、同じようなことが各地で行われたその一つの背景には「以戦養戦」、「現地調弁」というような思想があったのではないかと思います。勿論、それがすべてではありません。そのことは日本近代史における戦争史をきちんと勉強しないと十分な発言はできないんですが、一つの側面だけを申し上げました。

答：伊藤泉美

日本の華僑が商人層に限られたことについてなんですが、やはり一番重要なものは日本の政策、条約、法律による規制だと思います。それはまず居留地というものを設定しまして、そこから外国人がその居留地の外に出て、経済活動を営むことを禁止したということですね。日本の居留地は最大の横浜にしても1平方キロメートルですので、そこに農業の広大なプランテーションや金・銀の鉱山があったのではないので、職業的に、平面的に限られた場所であって、そういう居留地を条約をもって結んでいたわけですね。

もう一つは、条約が撤廃される条約改正によって、先ほど内地雑居令と申しましたが、居留地の外で外国人が経済生活を営む場合には農業、漁業という第一次産業、肉体労働に就くことは許可しないということです。日本社会の経済の状況というのもあって、根本的には条約、法律による規制ではないかと思っています。

## 司会者のまとめ

小風 秀雅

この分科会は、国際日本学の一つの柱としての近代日本史を扱うセッションとして設けたが、その狙いは、従来日本史研究のなかで欠けていたと思われる比較史的視点、ないしは国際関係史的視点を打ち出すところにあった。

今までの近代日本研究は、国際的視点と言いつつも、どうしても日本から脱し切れない部分があった。換言すれば、日本から国際関係を発想するという、日本を自明の前提として問題を立てていく傾向があったように思われる。最近では、世界システム論や、東アジア関係史の視点から、日本を外から見ようとする動向が出てきてはいるが、近代史に関していえば、未だ部分的なものに止まっている。

そこで、本分科会では、比較史、関係史という視点で外から日本を見ていこうとしている3名のスピーカーをお招きして、近代日本に対する外からの問題提起をしていただこうと計画した。前掲の報告書については、当日の発表および質疑応答を踏まえて、書き下ろされたものであり、必ずしも当日の論議そのままではないので、ここでは、当日の討論に則して論点を2点に集約してみたい。

第一は、従来は、自国史を投影したかたちで日本像が形成されていた、つまり近代日本の実像というよりは東洋の近代化ないしは帝国主義的侵略のモデルイメージとして語られていたのに対して、近年は、実証研究が進んでいくなかで、しだいに他の側面にも着目して、全体として日本の実像に迫ろうとする研究が出てきている、という点である。

アイドゥン報告では、トルコの日本イメージは、東洋諸国の近代化を代表するプラスイメージとして理解され、自国の近代化を促進する材料として利用されてきた点が指摘されるとともに、帝国主義国としての負の側面に対する関心も高まってきていることが紹介された。一方井村報告では、中国東北における日本研究は、日本の「満州」経営すなわち日本の中国侵略の歴史として、日中関係の負の側面に集中していることが指摘された。しかし同時に、開拓団などの実態調査、農村の現地調査が行われるよう